

第3章 千葉市の歴史文化の特徴

1 歴史文化の特徴

(1) 歴史文化を捉える視点

ここまで千葉市の自然・地理的環境や社会的状況、歴史的背景、そして文化財の概要について述べました。千葉市域は、東京湾に面する西側と印旛沼・手賀沼、そして茨城県の霞ヶ浦を内包した内海(香取海)が広がっていた北側の二方を海に囲まれた自然・地理的環境を有し、それぞれの海に注ぐ大小河川によって台地と低地が形成されました。また、下総台地の特徴である高低差の少ない平坦な地形により、台地上に多くの集落がつくられ、往来のしやすさから他地域との交流が生まれました。各時代を通じて、海と陸を巧みに利用した生活が営まれ、文化が醸成されてきた点が千葉市の特徴です。以下の表は、千葉市の歴史文化の特徴をこの点に着目してまとめたものです。

千葉市の歴史文化の特徴			
時代別の特徴	海と陸を活かした人々の営み		
縄文 地域資源の利用による定住、持続可能な社会の実現	全国有数の大型貝塚密集地帯	物流ネットワークの形成	漁業
弥生 南北文化の交流	弥生時代後期における南北の文化圏の影響	埴輪の特徴から見る九十九里地域との交流	稻作
古墳 小豪族による地域支配	小豪族による群集墳の増加	上総国分寺・尼寺を支えた地 土気	民衆仏教の広がり
奈良・平安 上総と下総の分岐点 (古東海道) 陸路と海路の交通の要衝	上総国分寺・尼寺を支えた地 土気	上総と下総を結ぶ場所 (交通網の整備)	千葉氏と妙見信仰
中世 千葉の礎を築いた千葉氏 鎌倉と房総を結ぶ重要な湊町	鎌倉幕府の創設に貢献した千葉氏	房総の玄関口 房総各地と江戸を結ぶ	土気城と酒井氏 打瀬船、貝類の産地
近世 江戸と房総各地を結ぶ場所		街道、近世牧の整備 湊、花見川での大規模開削工事、五大力船による海運	用水堰の開削による海岸低地部の新田開発と甘藷の栽培
近代 軍郷千葉の成立と近代化	民間航空 発祥の地 人工海浜 海辺の活性化	保養地 稻毛 チバノサト 内陸部の活性化	軍郷千葉 千葉空襲からの復興(計画) 交通網の発達(千葉港、鉄道、道路)
現代 戦災からの復興 一新しいまちづくり			打瀬船、海苔・貝類の養殖 埋立てによる生業の変化と伝承される祭礼と信仰
【歴史文化の特徴】		東京湾と下総台地がもたらした豊かな自然資源	房総と鎌倉・江戸・東京を結ぶ中継地
			海と陸の文化を取り入れ育んだ生活と信仰

(2) 歴史文化の特徴

①東京湾と下総台地がもたらした豊かな自然資源

東京湾の海産資源と下総台地の陸産資源という2つの豊かな自然は、各時代の文化形成の根幹をなし、加曽利貝塚や古墳、千葉氏による中世のまちなどが形成されました。近・現代においても、自然地形を活かした飛行場やリゾート地の歴史を伝える資料や景観、谷津田の田園風景が遺り、自然景観が広く親しまれています。

千葉市は、東京湾沿岸に遠浅の砂浜海岸が広がり、貝の採取や海苔の養殖など海産資源を盛んに利用してきました。また、下総台地の平坦な地形は、小・中の河川によって開かれた谷津が樹枝状に刻まれています。そこには豊富な湧水があり、落葉広葉樹林がもたらす堅果類とそれを食料に生息する動物といった豊かな陸産資源を利用してきました。このように千葉市の自然環境の特徴は、東京湾の海産資源と下総台地の陸産資源、2つの豊富な資源に恵まれていることです。これは、縄文時代では加曽利貝塚に代表される大型貝塚が多く形成される要因として、古墳時代では古墳を築造する経済基盤として、中世では千葉氏が千葉を本拠とした要因として、各時代の文化形成の根幹をなしています。

稻毛海岸などの東京湾沿岸は、干潮時は固くしまった広大な砂浜となり、明治から大正にかけてこれを滑走路に利用した、日本初の民間飛行場として多くの飛行家に愛されました。また、海水浴や潮干狩りが楽しめるリゾート地として知られ、昭和30年代の埋立て開始まで多くの人で賑わいました。埋立てにより変化したものの、現在は、いなげの浜から幕張の浜にかけて4.3kmに及ぶ日本一の長さを誇る人工海浜が整備され、魅力的な海辺の景観は変わらず親しまれています。

一方、若葉区や緑区などの内陸部は、下総台地に無数に入り組んだ谷の湿地に作られた谷津田、里山や屋敷林に囲まれた集落などの田園風景が広がります。近年は、このエリアを「チバノサト」と称し、グリーンツーリズムを推進するなど、千葉市の魅力である都市部に残る豊かな自然環境を活かしたまちづくりが行われています。

②房総と鎌倉・江戸・東京を結ぶ中継地

海と陸の利便性を活かし、古代から海上・陸上交通の要衝として発展してきました。東京湾の対岸の鎌倉・江戸へ行き来する海上交通の拠点となり、明治以降の鉄道網の整備で政治・経済・文化の面から、房総半島における中心地としての地位を確立しました。

海と陸のどちらの利点も活かせる千葉市は、人とモノが行き交う要衝と言えます。縄文時代には海にも陸にも行きやすい環境を利用することで、加曽利貝塚に2,000年繰り返しムラが営まれました。

古代には、下総国府が置かれた現在の市川市と、上総国府が置かれた現在の市原市を結んで、東京湾に沿った東海道が整備され、千葉市はその中間に位置しました。さらに、中央区千葉寺町辺りに推定されている河曲駅家から内陸に入り、佐倉市や成田市を経由して現在の茨城県である常陸国に入るルートが整備され、まさに千葉市は、人やモノが行き交う要衝でした。

中世には、東京湾の対岸の鎌倉へ行き来する湊として、都川河口付近の結城浦(千葉湊)が海上交通の拠点となりました。近世以降は、登戸、寒川、浜野などが湊として

使われ、江戸や浦賀との間で盛んに物資が行き来しました。

このように千葉を起点に、房総各地へつながる玄関口として、「海」と「陸」の交通の結節点であることが、千葉市が上総・下総地域の中心地となった重要な要因です。

明治初頭に軍事施設や県庁、教育機関が設置され、続いて鉄道路線が開通したこと、東京や県内各地と鉄道で結ばれた千葉市は、房総半島の政治・経済、軍事、文化の中心地として発展しました。さらに、交通の利便性から、幕張海岸から出洲海岸までの沿岸部は、観光地として人気を博しました。

現代においては道路網も充実し、首都圏へのアクセスもますます容易になり、また、千葉港は国際的なコンテナ港として物流の拠点となっています。

このように、地理的な特徴から、房総各地と江戸などの中心地とを結ぶ中継地の役割を担うようになり、房総半島における中心地に発展しました。

③海と陸の文化を取り入れ育んだ生活と信仰

海と陸の豊かな自然資源に根ざした東京湾沿岸部の漁業や内陸部の農業が発展し、それらは海の神を祀る祭りや山岳信仰などの民俗文化を育んできました。都市化が進む現代においても、自然との関わりの中で育まれた生活や文化は、千葉市の歴史文化を物語る重要な要素として受け継がれています。

千葉市域は海と陸の豊かな自然環境により歴史が紡がれてきた背景があり、これらは生活する人々の生業にも結び付いてきました。

縄文時代に始まった東京湾沿岸での海産資源の利用は、昭和30年代の埋立て以前まで行われており、千葉市の臨海部における大きな特徴でした。漁業は現在ほとんど行われていませんが、遠浅の海を利用した海苔や貝類の養殖に使われた漁労具などは、当時の漁業の重要さを伝える大切な資料として受け継がれています。

農業は、豊かな自然資源を背景に、無数の谷津田を利用した稻作や肥沃な土地を活かした畑作が盛んに行われました。特に江戸時代に飢饉対策として、甘藷の試作地に幕張が選ばれたのを機に始まったさつまいもの生産は、江戸など近隣地域の庶民の食を支えました。現代においても都市化が進む中、若葉区などの内陸地域では、都市農業や体験農園といった新しい形の農業も盛んです。

このように人々の生活は、海と陸との関わりの上に成り立っており、それは民俗や信仰とも関わっています。漁業が盛んであったことから沿岸部は海の神を祀る神社が多く、海に関連した祭りがあります。稻毛浅間神社はかつては海中に鳥居が立ち、これをくぐって参詣していました。寒川神社の例祭は、千葉妙見の祭礼に由来する、神輿を担いで海に入る御浜下りの習俗が、地域の人々の熱意により復活しました。

また、江戸時代中期以降に広まった出羽三山信仰や富士信仰といった山岳信仰に関する石碑は、中央区蘇我町や仁戸名町周辺、花見川区畠町や幕張町といった市中央部から北部・西部にかけての農村地帯に多く見られ、無病息災や豊作祈願、また、成人儀礼として現代でも一部地域に残る民俗文化です。

このような民間に伝わる祭礼や信仰は、都市化や生活様式の移り変わりに伴い変化してはいるものの、自然との共生や人々の暮らしの中で育んできたもので、千葉市の歴史文化を物語る重要な要素です。